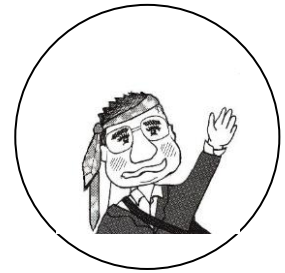


大魔王のお笑い神話



謎の超笑力をもつ大魔王が、あなたに贈る不思議なムダ話

発行：トラベル・ミトラ・ジャパン

ぼん子画

(530-0041) 大阪市北区天神橋 1-18-25 第3マツイ・ビル 201 TEL: 06-6354-3011

お笑いエッセイのメール発信をご希望の方は、ご連絡下さい。(E-mail: daimao@travelmitra.jp)

日本語はオリッサから来たか

猛暑の8月6日(日)、映画評論家、ジャーナリストの三人で昼食をともにすることになった。ジャーナリストの御母堂様が急逝されたので、その供養の意味もあった。御母堂様はヨーギー(女性ヨーガ行者)といっても過言ではない。行者というよりは、清楚なディーディー(インド語で姉さま、道姉さま)のイメージに近い。ヨーガの指導中(あぐら坐)、一瞬にして身体から離脱された。その場にいた受講生の誰もが、しばらく気づかなかったという。

その瞬間を聞いた女性が、悲しみを込めて言った。

「道姉のような人間になりたいという私の人生の目標がなくなってしまった・・・」

わが輩は7月15日(土)比叡山で講演する機会を与えられた。ディーディー道姉から資料の提供を受け、励まされていたのである。

この度、その道姉の愛嬢(ジャーナリスト)が韓国映画の本を出版した。贈呈用に三十冊予約されていたそうである。以前になんとか愛嬢の記事を掲載した月刊誌を頂いたことがあった。それに則って、今回は愛嬢から贈呈していただいた。

『現地発 韓国映画・ドラマのなぜ?』筑摩書房 成川彩著

実は、韓国の映画は「パラサイト」など数本しか見たことがなかった。果たして読み切れるかと不安ながらページをめくってみると、これが(失礼ながら)面白い。映画から垣間見る韓国の習慣や価値観がとても身近に感じられた。それに著者自身の留学時代の体験談が付け加えられてなお面白い。

「急激な少子高齢化と根強い家父長制」の項では、長男の責務(わが輩も長男)、母と息子の密な結びつき(密ではないが、母は特別な存在)、嫁と姑の衝突(経験済み)など、わが輩の古ぼけた価値観にぴったりだ。

インドでは親しい男性同士が手をつないで歩く。わが輩も最初は驚いたが、そのうち慣れた。韓国でもあるそうだ。これは新しい認識である。

最後半部は朝鮮戦争、光州事件、セウォル号沈没事故など重いテーマだが、映画を通じて読むと、シリアスなのに難解さが感じられない。2014年のセウォル号沈没事故はテレビで観たことがある。船長が乗船客をほっぽりだして真っ先に逃げたのは呆れ果てた。多くの修学旅行生が亡くなった。著者は朝日新聞記者として現地取材をしていた。これは事故なのに、

なぜ朴槿恵政権批判に繋がっていったのか、今一つ理解できていなかったが、通読して初めて理解できた。

とにかく、映画を観てから読んでもよし、読んでから観てもよし。

朝鮮語と日本語は似ているようだ。文化的には朝鮮が兄で、日本は弟だともいえるので、当たり前と言えれば当たり前の話である。

1980年ころ大野晋という学者が、日本語のタミル語起源説を唱え、大騒動になったことがあった。タミル語とは、南インドのタミル州、スリランカ北部などで話される言語である。この説を知ったタミルの友人は「実は、私もそう思っていた」と大感激であった。しかし日本のインド学者たちの大野批判には凄まじいものがあった。

もともと朝鮮語のタミル語起源説の研究者（韓国人女性とタミル人）がいて、それに大野晋が加わった、と茶飲み話で聞いたことがある。つまり、タミル語、朝鮮語、日本語が同系であるというわけである。

1981年『日本語はどこから来たか』藤原明、講談社が発刊された。ドラヴィダ語こそ日本語の起源であるとしている。ドラヴィダ語はインド南部とスリランカ北部で話されている言語である。タミル語、マラヤーラム語、カンナダ語、テルグ語などが含まれる言語である。

素人のわが輩からみれば、同じような説だと思えるが、学会で大野・藤原両氏の大激論があったと聞いている。ちなみに、わがミトラ城の肉丸は藤原先生の授業を受けたそうである。もっとも言語学ではなく、英語の授業であった。

藤原のドラヴィダ語説は、やがて「オリッサ日本語起源説」へと進展していった。オリッサ（現オディシャ州）は、コルカタ（ベンガル州）の南に隣接する州である。平野部は「米の国」と呼ばれていたように水田が広がっている。一方山間部は深く60ほどのトライブ（部族）がいるとされている。なんとなく日本人ぽい部族もいる。そのトライブに、日本原語に似た祖語が残っている、というわけである。

また、聖地プリーはラタ・ヤートラ（山車の巡行）で有名である。祇園祭の山鉾巡行に似ている。オリッサ出身のニルリプターナンダ師を案内したとき、「同じだ！」と喜ばれた。もっとも永ノ尾信悟教授のように「プリーよりも祇園祭の方が古い」という説もある。それでも、わが輩は何の根拠もないが、インドから伝播したと思っている。

この説を最も喜んだのはニキレーシュ・ギリ総領事である。オリッサ出身だからである。ちなみに、2022年大統領に就任したドラウパディ・ムルム女史も、オリッサ出身である。しかもトライブ（サンタル部族）出身の最初の大統領、女性としては2番目で、最も若い大統領である。インドは実に深い、と言わざるを得ない。

去る5月28日、われらは「オディシャ DAY」（オリッサ文化交流協会）を饗都ホールで開催した。スリランカ駐在僧高島行一上人にもご来場いただいた。高島師は北部のジャフナで前述のタミル人研究者と何度も会ったことがある。また師はオリッサで出家を決意した。あれやこれやで、オリッサと結びついている。

さいごに今だから告白しておこう。あの日はわが輩の誕生日であった。（意図的 or 偶然、おそらく神業）すべてがオリッサづくめ、めでたし、めでたし。